様式C-7-2

自己評価報告書

平成 23年 4月 11日現在

機関番号：24402
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008年度～2011年度
課題番号：20520419
研究課題名（和文）視点と基準点の諸問題

研究課題名（英文）Problems of viewpoint and reference point

研究代表者
丹羽 哲也（NIWA TETSUYA）
大阪市立大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：20228266

研究分野：日本語文法
科研費の分科・細目：言語学・日本語学
キーワード：文法、連体修飾、助詞「の」、敬語

１．研究計画の概要

本研究の目的は、日本語の文法研究において基礎的な概念である「視点」「基準点」に関わる問題について検討し、文法現象の説明を一層深化させるというものである。具体的には、テンス・アスペクト表現、連体修飾表現、敬語表現などにおいて、どのように基準点・視点が設定され、それによって各表現がどのように類型化されるか、という問題を考察していく。

２．研究の進捗状況

「基準点」と「視点」のうち、専ら「基準点」に関する考察が進んでおり、特に、基準と言えるものが複数ある、あるいは、固定的ではないという文法現象の考察を深めることができつつある。具体的には、以下の問題について、一定の成果を得ている。

（１）連体助詞「の」の用法は複雑多岐にわたるため､その類型化があまり進んでいない。本研究では､「修飾名詞＋の＋主名詞」という構造において、修飾名詞が関係を内在するタイプ（｢独身の女性｣)、主名詞が関係を内在するタイプ（｢私の母｣)、どちらも関係を内在しないタイプ（｢太郎の本｣）の３つのタイプに分けられること、「の」の関係が文脈によって自由に関係を構成すると言われるのは、上の３つ目の場合において言えることで、かつ、そこにも一定の制約があることを明らかにした。

（２）連体修飾節の中の相対補充と呼ばれる修飾関係において、古代語（特に中古語）では「幼き御後見」が「幼い御後見人」という意味ではなく、「幼い人の御後見人」という意味で成り立つことが知られている。本研究は、そのような表現がなぜ成立し得たのかという問題について、主名詞の意味的性格や古代語に存在した準体節との関係という観点から、その事情を明らかにした。

（３）連体修飾表現は、連体修飾節と連体「の」によるものがその主要な部分を占めるが､両者は別々に研究されてきた｡本研究は、上記の（１）（２）の成果を踏まえて両者を統合し、一定の範囲内ではあるものの、連体修飾関係の類型化をすることができた。

（４）テンス・アスペクト表現の中で、タ形とテイタ形のどちらを選択するかという問題について、客観的な状況によって決まる場合だけでなく、話し手の関心の置き方に左右されることが多いことを論じた。

（５）敬語表現の歴史において、絶対敬語から相対敬語へという変遷があることが知られているが、本研究は、高身分の悪人に対して敬語を使うか否かという問題を提示し、近世の浄瑠璃の詞章においては、敬語を使う絶対敬語的用法よりも、敬語を使わない相対敬語的な用法の方が顕著で、それはその演劇的性格に由来するということを明らかにした。これに関連して、浄瑠璃の詞章における、人称詞の使い分けや、口語的表現と文語的な表現の使い分けについても、身分や文体という面から考察を続けつつある。

３．現在までの達成度

②おおむね順調に進んでいる。

（理由）「視点」・「基準点」に関わる文法現象の中で、前者についてはほとんど進んでいないものの、後者についてはかなり進んでおり、計画段階では予想しなかった成果も挙げている。助詞「の」や連体修飾節については、

当初ほとんど見通しがなかったが、複数の基準点の相関という観点が有効に働いて、考察を深めることができた。また、計画段階ではもっぱら現代語における研究を予定していたが、それだけでなく、古典語についても連体修飾や敬語について成果を挙げることができている。

４．今後の研究の推進方策

（１）２で述べた連体修飾に関する成果を一層充実させることが重要と考え、連体修飾の意味構造について、まだあまり進められていない問題の考察を深めていく。それに関連して、抽象的な名詞の意味と文法の関係について考察を広げていく。

（２）浄瑠璃の詞章を中心に、敬語や人称詞などの使い分けの問題について、継続して考察する。

５．　代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

① 丹羽哲也、連体節と連体「の」との対応、文学史研究、51号、pp.44-58、2011年、査読有

② 丹羽哲也、相対補充連体修飾の構造―準体節との対応―、日本語の研究、6巻4号、pp. 95-109、2010年、査読有

③ 丹羽哲也、連体助詞「の」の用法記述のために、人文研究 大阪市立大学文学研究科紀要、61巻、pp.81-111、2010年、査読有http://dlisv03.media.osaka-cu.ac.jp/infolib/meta_pub/CsvDefault.exe?DEF_XSL=default&GRP_IDG0000002&DB_ID=G0000002KIYOU&IS_TYPE=csv&IS_STYLE=default（大阪市立大学、紀要論文データベース）

④ 丹羽哲也、『菅原伝授手習鑑』における敬語・無敬語、上方文化講座 菅原伝授手習鑑、pp.160-168、2009年、査読無

〔学会発表〕（計6件）

① 丹羽哲也、相対性連体修飾節の意味構造、日本語学会、2009年11月1日、島根大学